

四象八牛

安岳をゆく

2002年7月 四川省安岳県



漢中の夜

6月末、西安から始まった旅。7月中旬、漢中まで来ていた。もちろん、勉県の武侯祠へも行ったし、洋県の蔡倫墓、城固県の張騫墓などへも足を伸ばした。次の目的地は広元。そう、とうとう四川省へ足を踏み入れるのだ。

漢中では3泊した。ある晩、夕食を済ませ、シャワーに入って、ベッドに寝ころんで寛いでいた。テレビのリモコンを持ちながら、おもしろい番組はないかなと、チャンネルを変えていた。すると旅行番組に目が止まった。その番組は、石窟の紹介をしていた。何気なく見続けていたのだが、紹介されている石窟の造像の美しさに目を奪われる。「どこの石窟なんだろう。」と、とても気になる。実は、私はえせ石窟マニアなのだ。石窟や石刻があれば、とにかく行って見てみることにしている。今回の旅行でも、これまでに、大小十カ所近くの石窟を見て回ったのだ。さて、番組を見ているうちに、この石窟の場所が判った。「ふむふむ、四川の安岳というところか。」これから向かう先はちょうど四川省。テレビで見た美しい造像を、この目で直に見てみたい。メモ帳に書き記す。

安岳ってどこ？

7月下旬、成都。旅を始めて、1ヶ月あまりが過ぎた。成都は、なんとなく居心地がいい街だ。しばらくこの街で休憩しようと思ったが、ホテルでジッとしていられない質なのだ。ここ四川省は近年、成都を中心とした高速道路網が発達し、かなり多くの街へ素早く移動できるようになった。だから私もその恩恵を被って、高速バスに乗って、いろいろな街へ訪れることができた。ただ一つ困ることは、バスターミナルが多いので、どのバスターミナルからどの街へ

向かうバスが出ているのかが判りにくいこと。まあ、あちこちへ訪れているうちに、だいたいのことが感覚としてわかってくるようになる。

さて、安岳はどこにあるのだろうか。安岳と聞いて、パッと石窟の街だと言える人は、かなりの石窟マニアかもしれない。しかし、日本で安岳を紹介するガイドブックは皆無のようだし、訪れた人もかなり少ないのではないだろうか。そういう私もまったく知らない街だった。成都で買った四川省の地図で探す。「あった、大足の隣だ」。大足石窟といえば世界遺産にもなっている有名なものだ。その隣に「石刻之郷」と称される街、安岳があるのだ。



▲ 華嚴洞摩崖造像

さて、安岳へゆこう

さて、場所もわかったことだし、安岳へ行ってみよう。ところが、どのバスターミナルから安岳行きが出ているのか、わからない。困ったぞ。とにかく、安岳方向へのバスが出ているバスターミナルへ行ってみることにした。ところが、安岳行きがない。どうするか。時刻表を見てみると、安岳の隣の県、樂至へ行くバスがある。悩んでいても仕方ないので、それに乗ることにした。さて、成都を出て2時間ほどで樂至に到着。すぐに安岳行きのバスを探すと、あった。発車までちょっと時間があるが、そのバスに乗り込んだ。「おお、クーラーが効いているぞ」と、ちょっと嬉しい。しばらく座席で座っていると、なんだか様子がおかしい。「おい、おまえ、降りろ。」と声がする。話を聞いてみると、どうもこのバスはいきなりチャーターされたらしく、安岳へ行かないと言い出した。なんてこったい。どうしようもなく、次のバスを待つ。そして、なんとか安岳へ到着したが、お昼を過ぎていた。「ふう、ついてないなあ。」

石窟に行きたいんだよ

安岳のバスターミナルを出る。着いたのはいいが、石窟がどこにあるのか、わからない。テレビを見たときの記憶をたどる。「八廟」この地名だけが思い浮かんだ。やはり、もうちょっとしっかり前準備をしておくべきだったかな。地図を見ると八廟はちょっと遠い。バスはあるようだが、本数が少なく、時間も合わない。こういうときには、バイクだ。地元のおっちゃんも、もれなく付いてくる。さっそく、一人捕まえる。「安岳石窟に行きたいんだけど。」と声をかける。しかし、このおっちゃん、普通話が苦手らしい。四川訛の答えが返ってくる。どちらの言葉もあまり通じてないらしい。ゆっくり話すようにして、なんとか意志が通じた。

安岳にはたくさんのお石窟が点在している。しかし、どこにどんな石窟があるかを知らない。ここはおっちゃんに任せて、連れて行って貰うことにした。バイクにまたがり、出発。5分ほど走ったところで、停まった。おっちゃんが言うには、「ここが安岳石窟だ。」そう、ここは

圓覚洞摩崖造像がある場所らしい。安岳の中心から一番近い石窟だ。チケットを買って、意気揚々と進んでいく。「やっと素晴らしい造像を見られるんだ。」と心に思う。さて、石窟がありそうな崖が見えた。最初に目に入ったのは、小さな仏龕だった。ところどころにいくつか並んでいる。造像は風化しているものが多い。

「うーん、これが有名な石窟なのか。」と首を傾げる。テレビで見た造像の印象が強すぎたのかもしれない。それを見たい一心なので「ここはもういいや。」と投げ出してしまった。実は、これがまた一つの間違いとなってしまった。

「おっちゃん、他のところへ行こうよ。八廟って知っているだろう。」と、おっちゃんを急かす。しかし、おっちゃんの四川訛は強烈で、何を言っているのかよくわからない。「八廟は道が悪いから行けない。」と言っているのか。言われるがままに、バイクにまたがる。また走りだした。そして1時間は走ったのだろうか、石羊鎮というところまで来た。そう、おっちゃんは、毘盧洞摩崖造像へ案内してくれたのだ。



▲ 毘盧洞摩崖造像 第19窟観音経変窟

これだよ！ これ！

毘廬洞摩崖造像へ入って行く。するとすぐに大きな崖一面に刻まれた窟が目に入る。「これはすごいぞ。」第8窟柳本尊十煉図だ。大足の宝頂山にも柳本尊十煉図があるが、それに負けず劣らずの素晴らしさだ。そして、さらに奥へと進んでいく。すると、一体の言葉にできないほどの美しい造像が目に入った。「ああ、これだよ。これがテレビで見た、あの美しい造像だよ。」隣にいたバイクのおっちゃんに向かって叫んでしまった。そう、私が見たかったものはこれなのだ。通称「紫竹観音」、第19窟観音経変窟の観音様だ。素晴らしいという言葉では言い表せないほどなのだ。めちゃくちゃ感動してしまった。おっちゃん、ありがとう！

さて、ご満悦の私は、おっちゃんに連れられて毘廬洞を出ようとする。すると、チケット売り場で呼び止められた。「安岳石窟の資料を買わないか。」と言ってくる。せっかくなので見せてもらう。安岳石窟の分布図、石窟の写真集などがある。写真集を手にとって見てみると、素晴らしい造像の数々が、綺麗に撮影されて、載せられている。パラパラと捲って行くと、一番最初に行った圓覚洞摩崖造像の写真が。「なんとんと。こんなに素晴らしい造像があるではないか。」そう、「もういや。」と、すぐに出てきた場所には、テレビでも見たまだ3尊の素晴らしい造像があったのだ。やはり下調べはしっかりするべきだった。大失敗だ。「おっちゃん、街へ戻る前にもう一回、圓覚洞へ行ってくれ。」と頼み込んだ。



▲ 毘廬洞摩崖造像 第8窟柳本尊十煉図窟



▲ 圓覚洞摩崖造像 第7窟「浄瓶観音」

華嚴洞、圓覚洞、街へ戻る

さて、毘廬洞で資料を買ったあと、再びバイクにまたがる。すぐ近くにもう一つ、華嚴洞摩崖造像があるので、そこへ案内してくれた。華嚴洞、規模は大きくないが、ここにも素晴らしい造像が並んでいる。建物の内部にあるので、薄暗くて見にくいですが、とにかく精巧な造りが見る者を飽きさせない。そして、お隣の大般若洞も見せて貰い、街の方向へと向かった。

おっちゃんの運転するバイク。私は後ろにまたがっている。もう何キロ走ったのだろう。お尻が痛くて痛くて大変だ。おっちゃんは暢気に四川訛で話しかけてくる。でも何を言っているのか、あまりわからない。しっかり聞けば解るのかもしれないが、お尻が痛くて集中できないのだ。「ああ、ケツが痛い。」

街に戻る前にも、石窟への方向を示す看板がいくつか目についた。さすがに石刻之郷だ。そしてバイクは、2度目の圓覚洞へとたどり着いたのであった。



▲ 圓覚洞摩崖造像 第10窟「釈迦拈花微笑」

再び圓覚洞に入る。今度は地図もあるので、見たいものがある場所へ迷わず行くことができる。着いた。目の前には、高さ約7mの大きな造像が3尊並んでいる。大きさもさることながら、その彫刻の美しさ、精密さ、優雅さ、そして保存状態のよさ。どれをとっても素晴らしいの一言に尽きる。

安岳石窟は、安岳県内の広範囲に分布しており、その数は217カ所にも及ぶ。そしてその造像の数は十万尊以上だとされる。最も初期のものは南朝梁代に開鑿され、唐代、宋代には最盛期を迎える。「紫竹観音」など、今回、私が見て回った造像は、宋代のものである。

他にも、臥佛院摩崖造像や千佛寨摩崖造像、茗山寺摩崖造像などが有名だ。

さすがに「石刻之郷」と呼ばれるだけのことはある。その名に嘘偽りはないと感じた。

さて、見たかったものは見る事ができた。おっちゃんと一緒に街へ戻って、一休みすることにした。それにしてもお尻が痛い。

レモンの郷

街へ戻ると、お土産屋に入った。安岳はまた「檸檬之郷」とも称されるそうだ。そういえば郊外にはたくさんの樹木が栽培されていたな。あれは全部、レモンの木なのだ。安岳のお土産にはレモンのお菓子がいいのかもしれない。



▲ 黄桷大佛

「今日中に成都へ戻りたいんだけど。」と、おっちゃんに言うと、「19時半に最終バスがある。心配するな。最後に大仏を見に行こう。」と、言われるがままに連れられていく。この大仏は大したことがなかった。さて、おっちゃんにお代を払う。「1キロ1元、今日は200キロ走ったよ。」地図を見てみると、確かに200キロ以上は走っている。お尻が痛くなるわけだ。

そしてバスに乗り込む。おっちゃんが見送ってくれた。素晴らしい石窟を巡る安岳の旅が終わった。おっちゃん、また来るよ。再見。